

生涯教育月報

2017
秋冬

季刊 No.115



伝統文化「歌舞伎」に親しむ 2

特別寄稿
静岡大学名誉教授 小和田 哲男さん 8

プロフィール・インタビュー
笛吹市 市長
山下 政樹さん 12

いつでも どこでも だれでも学べる



公益財団法人北野生涯教育振興会
KITANO FOUNDATION OF LIFELONG INTEGRATED EDUCATION



歌舞伎に親しむ

当財団では、日本の伝統文化について学ぶ講演会を開催しています。今回のテーマは「歌舞伎」でした。

講座は2回にわたって行われ、6月17日は歌舞伎の基本を学ぶ講演を受講、6月24日には国立劇場歌舞伎鑑賞教室にて第一部「解説 歌舞伎のみかた」、第二部「歌舞伎十八番の内 毛抜き」を鑑賞しました。

主催 (公財) 北野生涯教育振興会

共催 (公財) 目黒区芸術文化振興財団

歌舞伎とは

日本の伝統文化として知られる歌舞伎の語源は、「傾(かぶ)く」という言葉です。戦国時代末期から江戸時代初期にかけて、奇抜な行動や服装で大衆の注目を集める人たちは「かぶき者」と呼ばれていました。そんな人々の振る舞いや様相を模した踊りが、歌舞伎のルーツとされる「かぶき踊り」です。1603年に出雲阿国と呼ばれる人物が京都でかぶき踊りを始めて以来、400年以上の歴史を持つ文化になりました。2008年には、能・文楽とともにユネスコの「人類の無形文化遺産の代表的な一覧



さっそうとした立ち廻りを披露する中村隼人(国立劇場蔵)

歌舞伎の特徴的な演出技法

表」に記載され、世界に誇る文化遺産として多くの人に愛されています。

歌舞伎には特徴的な演出技法が多く用いられています。舞台から直角に客席をつらぬいて設置されている廊下のような道は「花道」と呼ばれ、俳優がお客さんに近付き、舞台と客席とが一つになる雰囲気を作り上げます。芝居やお化粧にも特徴があり、俳優が演技の途中で動きを止めてポーズを取ることで演技を強調する「見得」や、顔に鮮やかな線を描き、それぞれの色や模様で役者の性格を表現する



弾上(父 錦之助)が若衆(子 隼人)に戯れかかる場面も面白い(国立劇場蔵)

国立劇場にて行われた「歌舞伎鑑賞教室」

「限取」などがあります。

歌舞伎鑑賞教室は、第一部は「歌舞伎のみかた」の解説、第二部は「毛抜き」の上演という二部構成になっており、「歌舞伎のみかた」では、中村隼人が解説役を務めました。舞台の構造や仕掛けを実際に動かしたり、「立ち廻り」や「毛振り」といった歌舞伎特有の動きを実際に演じたりと、歌舞伎における重要な要素についての分かりやすい解説はまるで歌舞伎演目的一幕を見たようでした。SNSを使って歌舞伎を広める試みとして、「#歌舞伎みたよ」とのスクリーンを背景に中村隼人を撮影する時間が設けられ、歓声とシャッター音で劇場内は大いに盛り上がりました。

「毛抜き」のあらすじと見どころ

舞台は平安時代。小野小町の子孫である小野春道の館では、春道の娘である錦の前が、髪の毛が逆立ってしまう謎の病気がかり、婚約が延期となる事件が起きていました。婚約者の家来である糸寺弾正は春道の館へ訪れ、その奇病を目の当たり

伝統文化

講演「歌舞伎はどんな芸能か？」 頭ではなく、心で捉える

6月17日の第1回講演会では北潟喜久さんを講師にお招きし、歌舞伎や日本の芸能についてお話していただきました。

講師 北潟 喜久さん

略歴
国立劇場で、古典芸能後継者養成の教務、古典芸能の制作業務等担当。現在は、古典芸能、民俗芸能関係の執筆、講演を行っている。



そもそも、歌舞伎とはどのような芸能なのでしょう。これには日本人の美意識、日本文化の傾向が関わってきます。日本には、現実存在するものをそのまま捉えるのではなく、そこに人の手を少し加え、一工夫して捉えることを良しとする考え方が存在しました。ここで大切にされたのは、出来事を忠実に再現するのではなく、その出来事をどのように感じたか、なぜ心が動かされたのか、そして、その心の動きをどうやって表現するかということでした。例を挙げれば、鳥の鳴き声や海の音などを表現したい時、忠実に再現したければ、機械で録音したような音を流せば良いのですが、歌舞伎は実際の音にはこだわりません。心にどう響いたかを表現すれば良いからです。逆に言えば、雪の降り積もる土地といった無音の場面でも、器楽を用いて音を表現することがあります。この考え方は「風流」と呼ばれ、鎌倉時代・室町時代などの中世以降、その傾向は強まり、芸能にも影響を与えました。その中でも、歌舞伎は飾り付け、デコレーションが多く用いられ、それによって心の動きを伝えようとする芸能なのです。

歌舞伎を観る時に一番大切なことは、あらずじを気にし過ぎないことだと思っています。中世のかぶき者たちから始まった歌舞伎には、しっかりとした脚本は存在しませんでした。それなのに、あらずじを理解してちゃんと鑑賞しようとしてもあまり意味がありません。大事なのは、心で楽しむことです。好きな役者が、良い場面で、良いせりふ回しをして、胸がじんとする。その鑑賞こそ、歌舞伎を一番楽しむ方法です。頭ではなく、心で捉える。理性ではなく、感性で楽しむ。そうした考え方を持って、歌舞伎を楽しんでいただきたいと思います。



北潟講師の講演を熱心に聴く参加者（中目黒GTプラザホール）



にして驚きますが、薄衣（女性が外出時に顔を隠すために被る着物）を被せると髪が逆立たないと聞き、不思議に思います。春道との面会を待つ間、弾正が毛抜で髭を抜いていると、置いていた毛抜が突然動き出します。しかし、銀でできた煙管は動きません。これは一体なぜなのか。錦の前の病気の原因とその

裏に隠された悪人たちの企みを、糸寺弾正が明らかにしていくという物語です。この作品は、寛保2（1742）年に二代目市川團十郎によって初演され、明治42（1909）年に二代目市川左団次が復活上演して以来、人気演目の一つとして上演を重ねています。主人公の糸寺弾正が動き出す毛抜に注目する場面では見物が用いられ、役者の美しく力強い演技を楽しむことができます。一方で、糸寺弾正が家のお手伝いをしている女性を口説

いて振られるという愛嬌のある一面を見せる場面もあり、見た目にも面白く、歌舞伎を初めて見る方にも分かりやすい作品となっています。二代目中村錦之助と中村隼人の親子が共演する場面も、見どころの一つです。研修の締めくくりは劇場内の食堂（おはこ）にての昼食です。幕間というわけにはいきませんが、みんな感想などを述べ合いながらお弁当を食べ、芝居見物気分を味わいました。



第149回研修会 「ふるきよきものの伝承」 (その24)

2017年7月21日(金)~23日(日)

失われつつある
日本の精神文化を求めて



福澤諭吉記念館にて

偉人のふるさとを訪ねて(北九州編)

教育者 福澤諭吉と その弟子 松永安左エ門

今回は、啓蒙思想家、教育者として知られた福澤諭吉が1歳から19歳までを過ごした大分県中津市と、その弟子で「電力の鬼」といわれた松永安左エ門のふるさと、長崎県壱岐市を訪れました。

福澤諭吉が青年期を過ごした家(享和3年築)と土蔵が残されています。隣接する記念館では、「天は人の上に人を造らず……」の書き出しで有名な「学問のすずめ」や「西洋事情」などをはじめ、

福澤諭吉旧居・
福澤記念館



山国川対岸より競秀峰を望む

北九州空港で青空に迎えられた一行は、貸切バスで一路、大分県中津市へ。大分を代表する景勝地である耶馬溪の青の洞門と競秀峰を訪れました。競秀峰は福澤諭吉が自然保護のために私財を投じたナショナルトラスト第一号の地とされています。昼食後、福澤諭吉旧居・福澤記念館と中津城を見学しました。

黒田孝高(如水)が豊臣秀吉の命令により九州を平定し、中津16万石を拝領して、天正16年に築



模擬天守と復興櫓

中津城



福澤諭吉旧居を見学する参加者

遺品・遺墨、書簡などが展示・保管されています。



足利尊氏と直義が全国に建立した安国寺の一つ。元弘の乱以来の戦死者の冥福を弔うためにもともとあった海印寺を安国寺にした

きました。地形が南方に扇状になっていいため、扇城という別名があります。海を臨む日本三大大城の一つで、当時のままの内堀は海に通じ、潮の干満で水位が変わります。

2日目は博多港からジェットホイルに乗船し、壱岐島へ。福沢諭吉の「学問のすずめ」に感銘を受け、慶応義塾に入学した松永安左エ門のふるさとです。「電力の鬼」と呼ばれ、電力の国有化に反対し、電気事業の分割民営化を成し遂げた立役者です。民間の自由競争による電力の供給にこだわりました。壱岐島では、一支国博物館、原の辻王都一支国復元公園、安国寺そして、松永安左エ門記念館などを訪問しました。夜、希望者はそぞろ歩きしながら、屋台をのぞいたり、郷ノ浦祇園山笠祭りを見て歩き、雰囲気を楽しむました。

一支国博物館

「支国島の歴史は古く、「古事記」には、5番目にできた日本の国土「伊伎島」として、また「魏志倭人伝」には「一支国」として記載されています。「一支国」は大陸や朝鮮半島と日本本土を結ぶ架け橋として重要な役割を果たしていました。島内には「一支国」の王都があった国指定特別史跡の原の辻遺跡（弥生時代）や吉崎古墳群（古墳時代）など、480カ所の遺跡がありますが、この



曲面の屋根が特徴の
一支国博物館

博物館では、発掘された出土品が天井まで届く陳列棚に展示され、ガラス越しに見学することができます。また、日本や東アジアの歴史を踏まえながら、吉崎の通史をビューシアターで学ぶことができます。建物は故黒川紀章の遺作で、緑化された屋根など、見応えがあります。



ボランティアガイドから説明を受ける一行



原の辻王都一支国復元公園から
一支国博物館を望む

電力の鬼・ 松永安左エ門記念館

少年期を吉崎で過ごした松永安左エ門の功績を後世に伝える展示施設です。安左エ門は戦後、民間初のシンクタンク電力中央研究所を設立、さらに政・財・学・官界のトップで構成する「産業計画会議」を主催。専売公社の廃止、国鉄の民営化、高速道路の整備など、日本の近代化を推し進める提言を行いました。安左エ門は96歳で亡くなるまで、電気事業の世界にとどまらず、経済界、産業界に影響を与え、近代日本の発展をリードし



管理人 定村さんより安左エ門の功績を学ぶ

続けました。敷地内には生家があり、安左エ門が設立した福博電気軌道の車両が展示されています。

自然豊かな吉崎島

吉崎島には猿の姿にそっくりの「猿岩」や、吉崎島誕生神話の八本の柱の一つとされている「左京鼻」などの奇岩や、鬼の足跡と呼ばれる周囲110mの大穴など、ダイナミックな自然の風景を楽しむことができます。



島で最も高い岳ノ辻展望台から対馬や佐賀を望むことができます

郷ノ浦祇園山笠祭り

一行が吉崎島に滞在した7月22日、23日は、郷ノ浦祇園山笠祭りが開催されました。270年以上の歴史を誇る八坂神社のお祭り、当初は疫病退散の祈願のために始められましたが、時代とともに五穀豊穡、商売繁盛、大漁祈願、家内安全とさまざまな願いが込められるようになりました。



寒流



新道流



本町流

「美術研修」(その55)

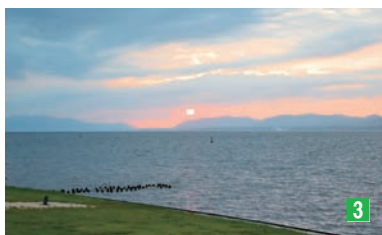
2017年9月20日(水)~21日(木)

ここにしかない アート・風景に出会う 山陰の美術館を訪ねて

初秋の2日間、美術研究家の沼辺信一さんを講師に迎えて
山陰の3つの美術館と、博物館を訪れました。



1



3



2



5



4



7



6

- 島根県立美術館
- 足立美術館
- 植田正治写真美術館
- 島根県立古代出雲歴史博物館

東京から1時間半ほどの米子空港からバスに乗り換え、神々が集う縁結びの地出雲へ。島根県立古代出雲歴史博物館では出雲大社と神々のまつり、出雲国風土記、青銅器と金色の太刀というテーマに沿った展示などを見学しました。大量に出土した弥生時代の青銅器や金銀太刀(いずれも国宝)のその美しさと数の多さに圧倒されました。

続いて訪れた島根県立美術館では展覧会「福岡市美術館・北九州市立美術館名品コレクション 夢の美術館 めぐりあう名画たち」を鑑賞しました。今回は偶然、大規模改修工事による休館の時期が重なり、2つの美術館の名品が「めぐりあう」ことになったそうです。印象派のモネ、ルノワール、ドガからミロ、ダリ、ウォーホルそして、藤田嗣治、草間彌生など国内外の近代美術の巨匠たちの作品を心ゆくまで堪能しました。「日本の夕陽百選」にも選ばれた美術館からの宍道湖の夕日をゆっくりと鑑賞できるよう、閉館時間を日没後30分としていますので、刻一刻と変わる宍道湖の表情、まさに自然が生み出す芸術作品を日没まで楽しめました。

翌日訪れた安来市の足立美術館では「文化勲章受章の作家たち」展にて横山大観、竹内栖鳳をはじめとする近代日本画の名品を鑑賞しました。「庭園もまた一幅の絵画である」とは、美術館創設者足立全康氏の言葉ですが、その5万坪の庭園も見どころの一つです。アメリカの日本庭園専門誌で14年連続日本一に選ばれているそうです。

鳥取県の国立公園大山のふもとに建つ植田

デジタル一眼レフ カメラ入門 (その4)

2017年8月29日(火)~30日(水)

今回で4回目となる講座は、残暑厳しい鎌倉にて、講義と撮影実習、作品投影と作品講評、懇親夕食会と盛りだくさんな2日間でした。また、中目黒GTギャラリーで開催の参加者作品展は大変好評でした。

「デジタルカメラで写真を撮ることは簡単です。簡単ですが、大変奥が深いものです。今日はいいろいろお話していきますが、全てできなくても『これだけはやってみよう』ということを決めて、やってみてください。良い写真は1日に1枚撮れれば良い方です。たくさん撮って失敗して覚える、あるいは自分は何が好きなのかを見つけてみてください」との穴吹講師のお話で講座がスタートしました。露出、シャッタースピード、絞り、などの基本について各自でカメラの操作を実際に行ってみて確認し、アシスタントの学生3名が会場を回って教えてくれました。



夕食懇親会の後はスクリーン(写真中央)での作品鑑賞会を楽しみました

参加者は2日間それぞれがテーマを持って撮影実習に臨み、2日目の午後は作品をスクリーンに投影しての鑑賞・講評を通して展覧会出品作品を決めました。

おさえておきたい基礎知識 (講義内容より)

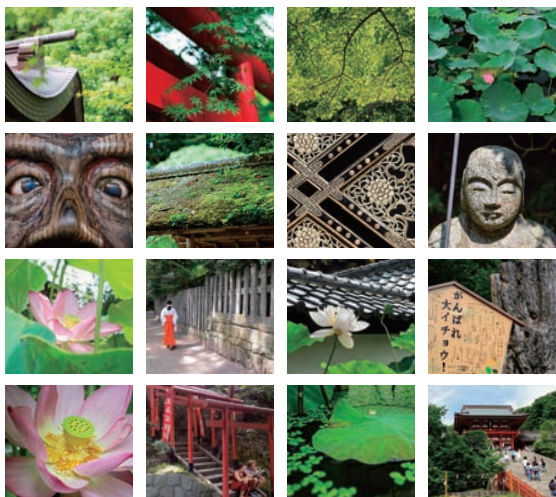
- 思い通りの明るさを出す → 露出補正
- 躍動感を出す → シャッタースピードを変えてみる
- 雰囲気伝える → 絞りを変えてみる

※ 各自でテーマを決めて「露出」「シャッタースピード」「絞り」のいずれかに焦点をあてて撮影実習にのぞみました。

写真展

「わたしの見つけた瞬間」vol.4

2017年10月23日(月)~11月1日(水) 於 中目黒GTギャラリー



誌上写真展



1鳥根県立美術館にて 22番目のうさぎを触ると幸せが訪れる? 宍道湖うさぎ(画面左が美術館右奥は宍道湖)
3宍道湖に沈む夕日の美しさは格別 4鳥根県立古代出雲歴史博物館では学芸員さんに見どころをお話いただいた
5いずれも国宝の銅鐸(上)と銅剣(下) 68足立美術館の14年連続日本一の庭園 6窓が額縁となつて一幅の絵画のように見える庭園 8枯山水庭(左)と池庭(右) 7養殖が盛んな安来ならではのどじょうづくしの昼食 9植田正治写真美術館 10美術館前庭で雄大な大山をバックに記念撮影 11展示棟の間から望む水面には大山が映り込む



正治写真美術館は、鳥取県出身の写真家植田正治の作品を収蔵、展示しています。「リフレイン(繰り返し)」というキーワードで集められた作品からは、時代を越えて繰り返される被写体、撮影地、小物、技法などについて作家が追及し続けたものを感じてほしいとのことでした。

研修を指導くださった沼辺信一さんの「美術作品は、残念ですが自然には勝てないと思います。宍道湖の美しい夕日を見るとこっちの方がすごいと思わざるを得ないですね。今回の研修はお天気にも恵まれ、限られた時間を有意義に使えました。次回は春ごろ、日本海側の美術館を回る企画をしています。みなさまお楽しみに」とのお言葉で1泊2日の研修を終えました。

歴史好きの母から 歴史家が誕生した

武田信玄の話を よくしていた母

今年一月、東京両国の東京都江戸東京博物館で特別展「戦国時代展」が開かれたときのことである。刀剣コーナーが特に人気で、そこだけ列ができていて順番待ちをしていたが、私のすぐ前に並んでいた母親が、小学校五年か六年くらいと思われる男の子に刀剣の説明をしているのが耳に入ってきた。

母親はいまいうところの「歴女」、しかも「刀剣女子」ではないかと思



静岡大学名誉教授
小和田 哲男さん

われる。それぞれの刀剣にまつわるエピソードを語り、子どもがそれを真剣に聞いている情景を見ていて、いつとはなしに、自分の子どもの頃のことを思い出していた。

博物館に連れて行ってもらったという記憶はないが、家では、小学校低学年の頃から武田信玄の話はよく聞かされていた。母親は口癖のように、「うちは武田信玄の家老馬場美濃守の子孫だよ」と言っていた。たしかに、母の旧姓は馬場である。

おそらく、母も、母の父や母からそのように言われ、先祖の馬場美濃守が武田信玄の家老として、いかに信玄を支えてきたかを聞かされてきたのであろう。学校で武田信玄や上杉謙信のことを教えられる前から、家では川中島の戦いの様子などを聞かされて育った。母は房江という名前であるが、馬場美濃守の名乗りの信房とつながっているというのが自慢だったようである。

もつとも、大人になって、母の実家に残っている系図を見せてもらったら、馬場美濃守本人の直系ではなく、弟の系統のようだったが、子ども心には「先祖は武田信玄の重臣だった」という一言にはインパクトがあった。戦国武将が身近な存在になったことは間違いなく、戦国時代に興味・関心を持つきっかけになったことは確かである。

そんな母なので、母自身も歴史が好きで、「元祖歴女」の一人といってもいいのではないかと考えている。図書館から歴史小説を借りてきてよく読んでおり、私も、ルビが振ってあるのを選んでたまたま読んでいた。もしかしたら、私に聞かせた川中島の戦いなどの物語は、母が親から聞いた話ではなく、そうした本から得た知識だったのかもしれない。しかし、当時、テレビなどはまだなく、子どもの私は、夕食後、母が話してくれる戦国の話に夢中になっていった。

伝記を読んでいた ことが転機に

母が本好き、歴史好きということもあって、子どもの頃から本はよ

く買ってもらった。歴史の本といっても、子ども向けの偉人伝の類である。それも、同世代の子がエジソンだとかナイチンゲールなどを読んでいるとき、私は源義経とか豊臣秀吉など武将に関するものばかりであった。

伝記だけでなく、子ども向けの「平家物語」や「太閤記」などをよく読んでいたが、そうした読書体験が私にとっての思わぬ転機につながったのである。

子どもの頃、私はどちらかというと内向的で、引込み思案だった。教室でも目立つ存在ではなく、自分から手を挙げて答えるようなことはほとんどなく、先生に指されないよう小さくなっているのが普通だった。

ところが、ある時の国語の授業でそれが一変する。その日、先生が黒板に人という字を書き、「この字は“ひと”と読むが、上に別な字が付くと、“うど”と読む」と言っていて、狩人という字を示し、「同じような例を知ってるか」といって答えを促したのである。誰も答えられない。普段手を挙げたことのない私は、それこそ恐る恐る手を挙げた。

先生は意外な子が手を挙げたとい



母の米寿の祝いで飛騨に行ったとき、江馬氏館跡にて

う顔で私を指したのである。私は、「落人という字があります」と答えたと、「それはどういう意味だ」と質問されたので、私は源平の戦いで敗れた平家の人びとが各地に落ちていったことを説明した。その答えが的を射ていたのか、「小和田は歴史博士だな」と言ってくれたのである。その後、同級生からは、歴史に関して一目置かれる存在となった。ちょうど六年生で、社会科も歴史部門を学習することになるので、社会科は私の得意科目となり、「歴史だけは他の子に負けないぞ」と、ますます

歴史の本を読みあさるようになった。一科目でも得意科目が見つかる自信が付いてくるもので、その頃から引つ込み思案ではなく、性格も積極的になったのではないかと考えている。

ただ、このように、歴史好きだった母の影響で歴史は得意科目となったが、他の教科は、あと国語が好きな程度で教科の好き嫌いは同級生に比べて激しかった。もともと、これは考えようで、もし私が満遍なく全教科出来が良ければ、おそらく歴史家小和田哲男は生まれていなかったろう。

母からの思わぬプレゼント

「小和田は歴史博士だな」と言ってくれたのは、東京都千代田区立番町小学校の四年から六年を担当していただいた福島精先生である。実はその福島先生にもう一度褒められたことがあった。

鎌倉に遠足に行くことになった。「せっかく鎌倉に行くなら、何か関係する本を読んでおこう」と思って図書室の書棚を見ていたら、「北条時宗」という伝記があった。すぐ借りて読

んだわけであるが、中に円覚寺のことが書かれていた。円覚寺は遠足のコースにも入っていたので、その部分を頭に刻みつけていたのである。そうしたこともあり、遠足当日、一番印象に残ったのが円覚寺だった。遠足から戻り、遠足のときのことを題材にした作文を書くことになったとき、私は、円覚寺の石段がまん中だけへこんでいて、それは、鎌倉時代から何千、いや何万の人が真ん中を踏んだので磨り減ったのではないかと考え、「北条時宗が踏んだ石段を自分も踏んだ」と感動した気持ちをそのまま文章にして出したのである。

すると、数日後、「作文はこう書くのだ」と、先生が私の作文をみんなの前で読み上げてくれたのである。それまで私は作文が得意だったわけではなく、ましてやうまいと思ったことは一度もなかったが、先生に褒められるとすごい自信になった。

家に帰って、「今日、作文を先生に褒められたよ」と母に報告すると、母も喜んでくれて「よかったね」と言ってくれたわけであるが、それで終わりではなかった。そこからもう一つのドラマが始まるのである。数日後、母から一冊の本を手渡さ

れた。それが「全国児童生徒作品コンクール入選作品」（小学館）という本であった。学年別になっていて、入選作品だけあってみんなうまく書けている。そのときには感じなかったが、あとになって思うと、一つは、「ちょっとくらい先生に褒められ有頂天になるな。世の中にはもっと上手な子がいるよ」という意味と、もう一つ、「上手な子の文章を学んでもっとうまくなりなさい」という二つのメッセージが込められていたように思う。

実際、その後、入選作品を読んでも、読ませる文章を書くコツのようなものを学んだ記憶がある。作文がますます好きになったのはこのときの母からのプレゼントがきっかけになっている。歴史が好きで、書くことが苦にならないという資質はこの頃形成されている。

その母は仕事を持ちながら、子育てをしながら俳句の講座に通っていたりしていた。生涯学ぶ姿勢を持つていた母だからこそ、私のような息子が育ったのではないかと考えている。母は今年九十五歳になり、同じ市内に住んでおり、時折私が書いたものを届けると、喜んで読んでくれる。ありがたいことである。

財団ニュース

ご報告



第39回懸賞論文 「変化に挑む」入賞者が決定

今年も恒例の懸賞論文の公募が行われました。今回のテーマは「変化に挑む」。厳正な審査の結果、入賞者は左記の方々に決まりました。

| 賞 | 作品名 | 氏名 | 居住地 |
|---------|-----------------------|--------|------|
| 1席 | 共鳴 | 高橋 幸子 | 福島県 |
| 2席 | 自分に与えられた運と自分が求めたチャレンジ | 相野 正 | 大阪府 |
| | 心眼 | 小暮 愛子 | 群馬県 |
| 3席 | 守りから攻めへ | 渋谷 江津子 | 青森県 |
| | けん玉で異文化交流 | 田嶋 達也 | 千葉県 |
| | 角度を変えて考えてみる | 菱川 町子 | 愛知県 |
| | 表裏一体 | 平賀 千晴 | 千葉県 |
| | パーキンソンを友にして挑戦 | 藤原 伸治 | 神奈川県 |
| 佳作 | 咲き誇れ、南の花よ | 星野 有加里 | 宮崎県 |
| | スマイルカッターそれぞれの挑戦 | 赤松 隆滋 | 京都府 |
| | たとえ変化にさらされたとしても | 大江 美典 | 兵庫県 |
| | 絶望に挑む人 | 生越 寛子 | 大阪府 |
| | 成りゆく明日 | 神野 榮美 | 大阪府 |
| | 本気でやってみることで見えてくる世界 | 佐藤 圭 | 神奈川県 |
| | 自分史講座 | 佐藤 茂男 | 福島県 |
| | 不変なものを心の軸に | 鈴木 美智子 | 東京都 |
| | 科学は私の浮力! | 辻 志帆 | 岡山県 |
| | 「マルイチ」の母強し | 中野 康子 | 大阪府 |
| 古民家再生の夢 | 逸見 修 | 新潟県 | |

東日本大震災鎮魂 コンサートvol.5 結団式開催

当財団が主催する「東日本大震災鎮魂コンサートvol.5」(2018年3月11日実施)に際し、公募合唱団「フォーレ」のレクイエムを学ぶ「歌う会」の結団式が、2017年10月17日中目黒GTPラザホールで開催されました。合唱団メンバー60名出席のもと、合唱指導の荒牧小百合先生、竹内雅拳先生、ピアノ伴奏の矢野里奈先生の紹介のあと、声楽家で聖徳大学講師の米谷毅彦氏が、「歌うと云う祈りを美へ昇華する教会音楽の世界、G・フォーレの鎮魂曲を辿って」と題して講演をされました。



講演する米谷毅彦氏

荒牧先生からは「とても難しい曲ですが、しっかりと練習して美しいハーモニーを奏でましょう」と参加者に向けて、力強い挨拶がありました。

声楽家を 東北の小学校へ派遣

当財団では、プロの声楽家の歌声とピアノの演奏を生で聴いて、感じてもらうと小中学校への派遣プログラムを実施しています。今期、東北地方へは、宮城県気仙沼市立階上中学校、福島県いわき市立高久小学校と夏井小学校の3校へ派遣を実施しました。声楽家が登場して素晴らしい歌声を披露すると、生徒たちは目を輝かせて聴き入っていました。演奏のあとは、生徒たちが感想を述べ、お礼のエールを聞かせてくれました。



福島県いわき市立夏井小学校で披露する日本声楽家協会のみなさん

メディアアーティストによるワークショップ開催

メディアアーティストの橋本典久さんによる「デジタルカメラで驚き盤をつくらう!」のワークショップを、宮城県気仙沼市立中井小学校、福島県いわき市立入遠野小学校で開催しました。生徒たちは思い思いの工夫やアイデアを凝らして驚き盤を作りました。

また、「新発見! プラモ虫をつくらう」のワークショップを、横浜の桐蔭学園小学部で2週にわたって開催しました。



工作に励む
福島県いわき市立
入遠野小学校の
みなさん

お知らせ



美術研修(その56)

春日・耀く美術館を訪ねて

―水上・糸魚川・富山

天一美術館、谷村美術館、富山県美術館を訪れます。世界最速の芸術鑑賞、現美新幹線にも乗車予定です。

日程

2018年春

講師

沼辺 信一氏

定員

40名

表紙ギャラリー

当財団の使命は、一生学び続ける人を応援することです。学ぶ人が、今日よりも明日、一歩でもよくなろうと努力するには、目標が必要だと思います。そこで、世のため、人のために偉業を成し遂げた偉人を目標に掲げたいと考え、財団機関誌の表紙に登場いただくことにしました。

ヘレン・ケラー (1880 ~ 1968)

6歳の見えない、聞こえない、話せないという三重苦のヘレン・ケラーのところへ、電話を発明したベル博士の紹介で、アン・サリバンが家庭教師としてやって来ました。これがきっかけで、ヘレンの暗闇の世界に一条の光がもたらされることになりました。

サリバンは、手術のおかげで一応見えるようになったものの、失明していた頃、盲学校時代に盲目のローラという女性と指文字で会話をしていたことが、ヘレンの教育に大変役立ったのです。

ヘレンは井戸水を手に受けた時、全ての物には名前があることを悟り、指文字によってどんどん言葉を覚えていき、瞬く間に点字を読み、手紙が書けるようになりました。そして、ヘレンが大学を優秀な成績で卒業し、盲人のために尽くすことを終生支え続けたサリバンは、まさにヘレンを「知の世界」に

導いた「奇跡の人」でした。1937年、日本ライトハウス創業者岩橋武夫の熱心な要請で、ヘレンは来日しました。その後、2度にわたり来日、熱烈な歓迎を受けるとともに、身体障害者保護の法律制定に貢献するなどの足跡を残しました。

波乱に満ちた人生を、飽くなき好奇心と強靱な精神力、そしてユーモアを忘れぬ心で生き続けたヘレンは、今も全ての人を励まし続けています。



写真提供：東京ヘレン・ケラー協会

東京ヘレン・ケラー協会 公式シンボルマーク

「ヘレン・ケラーこそ青い鳥を発見したただ1人の人」というメーテルリンク夫人の言葉からデザインされた青い鳥とヘレン・ケラーの直筆署名。



第45期 主要行事のご案内

- 2017年
 - 10月 ●ベトナム国立農業大学 奨学金授与式
 - 11月 ●理事会
 - 12月 ●評議員会
 - 研究助成金授与式
 - 懸賞論文入賞者表彰式
 - 論文集「変化に挑む―見えてくる新しい世界」発行
- 2018年
 - 3月 ●彫刻奨学生作品設置 奨学金授与式
 - 中国(南開大学・天津大学) 奨学金授与式
 - 東日本震災鎮魂コンサート
 - 懸賞論文公募
 - 科目等履修奨学生および放送大学大学院 修士全科奨学生 奨学金授与式および成果発表会
 - 美術研修(北陸方面)
 - 研究助成金公募
 - 洋上研修公募
 - 歴史研修(蝦夷の城めぐり)
 - 科目等履修生および放送大学生(選科履修生・大学院修士全科生)の 奨学生選考会
 - 「ミランダナオ子ども図書館」大学生奨学金授与式
 - ライブラリーセミナー
 - 伝統文化「雅楽」入門講座
 - 彫刻奨学生奨学金授与式
 - 7月
 - 研究助成金選考委員会
 - 懸賞論文審査委員会
 - 伝承研修
 - 「幕末維新に活躍した先人達―高知編」
 - 8月
 - インドネシア (POLINESIA) 奨学金授与式
 - 9月
 - デジタル一眼レフカメラ入門
 - 美術研修
 - ベトナム(フンサ高校、フンエン財務経営管理) 大学 奨学金授与式
 - 「ミランダナオ子ども図書館」保育所開所式
 - ※講師等の都合により、スケジュール等変更の場合もあります。

設立のねらい

当財団は、スタンレー電気株式会社の創業者北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足し、2010年12月1日に公益財団法人となりました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる機会をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持てるよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

生涯教育だより 第115号

2017年11月10日発行
 編集人 市橋 淳平
 発行人 北野 重子
 発行所 公益財団法人 北野生涯教育振興会
 〒153-0053 東京都目黒区五本木1丁目12番16号
 電話 東京 03(3711)1111

こ・ち・ら・編 集 室

「目黒のSUN祭り」は、1996年に「サンマは目黒に限る」という落ち目で有名な落語「目黒のさんま」にちなんで、気仙沼のサンマを目黒へ持って行って食べてもらおうという洒落から始まりました。サンマ5000匹を無料で配る試みは大好評で、協力団体も年々増え続け、目黒区民祭りのメインイベントになっています。

今年はサンマが不漁のため、昨年水揚げされた気仙沼産冷凍もので、何とか開催する運びになりましたが、来年はサンマが戻ってきてくれることを期待せずにはおられません。

ところで当財団創設者、北野隆春のふるさと山梨県笛吹市では、4年前からこの祭りに協賛し、「ふるさと物産展」へブドウを出品しています。市価の半額近い値段で、獲りたてのおいしいブドウが食べられるということで、リピーターも多く、閉会前に完売してしまっています。

外に目を向けると、自然災害が地球上をたびたび襲い、いつ戦争が起るか分からない厳しい世界情勢の中、こんなおんびりしたことを言っておかしいのですが、落語に登場するお殿様であれ、農民であれ、今、生きている我々でも、大根おろしを添えて、カボスをギョと絞った脂ののったアツアツのサンマを食す、秋の味覚を楽しむものです。こんな小さな幸せが、困難に立ち向かう清涼剤になることを願っています。



笛吹市 市長

山下 政樹さん

MASAKI YAMASHITA

文化とスポーツの機会を提供し
市民の暮らしを生涯豊かに

北野財団の創設者である北野隆春のふるさとであることから、当財団と深い縁で結ばれている山梨県笛吹市。2016年より市長を務めていらっしゃる山下政樹さんにお話を伺いました。

——山下市長が政治の道を志されたきっかけは何でしょうか。

祖父が議員を務めていたため、実家には多くの政治関係者が出入りし、幼い頃から政治が身近にありました。私も一度きりの人生だから好きなことをやりたいと、政治に興味を持つようになりましたが、当初は自ら議員になるとは考えておらず、政治家を支える仕事をしようと考えていました。富士急行に入社し、オーナーであり衆議院議員だった堀内光雄先生の秘書を目指しましたが、当然のことながら新卒で入社してすぐ秘書になることはできません。鉄道会社の社員として真面目に勤務していたところ、堀内先生が1990年に落選して会社



「笛吹市桃の里マラソン大会」で10kmコースを走りました(2017.4)

に戻られたときに、独身で身軽だった私をカバン持ちとして選んでくださいました。それ以来13年間、国政の最前線で実に多くのことを学ぶことができました。県会議員の方々と接する機会も多かったのですが、自分だったら地元の魅力をこんな風にアピールしたいというアイデアが浮かぶこともあり、地元のことを意識するようになりました。

36歳のとき、私の地元、石和町を地盤とする県会議員の先生が亡くなられたことがきっかけで、私に白羽の矢が立ちました。皆さんのご期待に応えなければ、という思いで、若さと行動力、しがらみがないという強みを生かして立候補し、県会議員に選んでいただきました。それが政治の道に入った経緯です。4期目に入った頃、支援者の皆さんが、笛吹市の市長になることを期待してくださるようになって、現在に至ります。ですから、自ら政治家を目指したというより、周りの方の期待に応えているうちに、導かれてここまで来たように感じます。

——現在、市長として注力していることや、笛吹市の桃とぶどうは日本一ですが、残念なこと全国的に知名度が高くなりませ

ることは何ですか。



ん。もっと上手にアピールし、本来の価値を広く知っていたために、パッケージを工夫したりして、ブランド力を向上したいと考えています。生産量の維持も課題のひとつです。

また、スポーツの振興にも注力したいと考えています。笛吹市はスポーツが盛んで、優秀な選手を輩出しているのですが、地元指導者がいなくなったり、練習のための施設が整備されていなかったりすることで、他の地域に出ていってしまつことが少なくありません。そこで地元で選手を育成できるように、サッカー等の球技専用グラウンドや陸上競技場を作りたいと考えています。選手だけでなく、一般市民にとってもスポーツが身近になれば、教育、福祉、医療の面で良い効果があります。笛吹市を生涯スポーツの街にしていきたいですね。

——北野財団についての印象はいかがですか。

まず、笛吹市合併前の境川村の時代から、地域発展のために多大なご支援をいただいておりますことに、感謝を申し上げます。北野財団といえ、境川町の「藤空の滝 大窪いやしの杜公園」ですね。2004年から彫刻作品の設置が始まり、

現在は66体が展示され、市民が芸術文化に触れられる良いきっかけを提供していただいています。この空間を活用するために、彫刻のライトアップをしたり、コンサート会場にしたり、ナイトシアターにしたりと、アレンジを加えていこうと企画を立てています。若い方に、笛吹市には楽しいことがたくさんあると思っただけならば、定住者も増えるかもしれません。積極的に新しいことに挑戦し、笛吹市の魅力を高めていきたいと考えています。

——余暇はどのように過ごしていますか。

母校である笛吹高校サッカー部の試合を応援に行くことが息抜きになっています。高校生が何か一つのことを打ち込んでいる姿は良いものですね。彼らには入部してから引退までのわずか2年数カ月をしっかりとやりきって、完全燃焼してもらいたいです。その経験は社会人になってからもきっと役立つはずですから。

——読者の皆さんにメッセージをお願いします。

笛吹市は、名実ともに日本一のおいしいフルーツの生産地です。美人をつくるという石和温泉もあり、そして何よりも人情味あふれる温かい街です。こんな笛吹市の魅力を多くの皆さんに知っていただきたいので、ぜひ足をお運びください。

山梨県では最年少の市長である山下市長。柔軟な発想で、笛吹市の魅力を多くの人に伝えたいと情熱的に語っていただきました。今後も北野財団と笛吹市のご縁を大切に、よろしくお願いたします。